

巻頭言

“助産学専攻科”の開設にあたって

神戸市立看護大学 教授
高田昌代

平成17年度より、神戸市看護大学は助産学専攻科を開設します。専攻科開設にあたって、多くの方々にご支援ご協力をいただきました。

開設準備をするなかで、戸惑ったことのひとつは、助産師の必要性の説明を「市」に求められたことでした。「この少子化の時代になぜ助産師が必要なのか」すなわち、少子化＝出生数が減る＝介助する助産師の仕事は減る＝助産師は今後必要ないのではないかと助産師養成に疑問を投げかける事務職員を納得させなければなりません。彼らが市に説明し、多くの人を納得させてはじめて予算がつくことになるのです。

助産師が必要でかつ現在不足していることは私には当たり前のことでしたが、いざ改めて説明を求められると容易ではありませんでした。助産や医療の専門家でない、いわば普通の人である彼ら事務方が納得するだけの分かりやすい統計の数字があれば話は簡単になるのですが、兵庫県、神戸市とも出生数は減少傾向、助産師一人当たりの分娩数、母子保健統計とも全国の水準から際立って低いわけではなく、助産師不足を数字で説明するにも助産師には定数というものがないので基準をもって多い少ないとは言えません。お産の現場ではもっと丁寧ににお産にかかわるための助産師が足りないことを数字でうまく表せないもどかしさがありました。

そこで今回は、年々増加している虐待件数ならびに相談件数をあげ、子育て支援として妊娠期から育児期まで継続的にかかわる助産師の役割が地域で必要である、しかし、地域で活動する開業助産師は少なくその分野での助産師が必要であるという理由を挙げました。さらに、①学生が助産師資格取得を望んでいる②病院や診療所には助産師の需要がある③女性たちがいいケアをする助産師を必要としている、の3点を併せて説明し、今、助産師が必要なことを理解していただきました。

世の中に助産師が必要であることは助産師にとっては自明のことですが、世間一般の認識との間には温度差があることを今回痛感しました。これまで私たち助産師は、妊産婦や女性を対象に良いケアをすることに多くの力を注ぎ、行政、政治、司法、企業、マスコミに向かって助産師の仕事やその必要性をアピールすることは、あまりしてこなかったのかもしれませんが。3職能を一緒にして名称を統一するという制度案がでてくる中、近藤潤子先生がおっしゃっている「看護師は generalist、助産師は specialist」ということ、そして specialist としての助産師がこれからますます必要とされていることを広く社会にアピールしていただくことも今後の助産師の活動として重要なことだと思います。

最後に、助産学専攻科の開設に向けて、今の助産師教育の動きをお教えいただき、励ましの言葉をかけていただきました皆様にこの場を借りてお礼申し上げます。

年頭所感 平成17年1月

日本学術会議会長 黒川 清

日本学術会議は、本年4月には内閣府に移管され、10月には新しい組織・新しい会員による活動がスタートします。その意味で、本年は、日本学術会議にとってまさに改革元年として位置づけられます。

新しい日本学術会議の体制に向けましては、現在、昨年8月に発足した「日本学術会議会員候補者選考委員会」において新会員の選考作業が進められており、また、昨年10月から「日本学術会議の新しい体制の在り方に関する懇談会」において、連携会員の在り方等が議論されています。

このような中で、会員、研連委員の皆様におかれましては、お忙しい中、学術会議の活動に時間を割いていただき、会長として感謝の意を表します。

「日本の計画」にあるように、21世紀には科学者のコミュニティも自らを改革し、20世紀に蓄積された地球規模の課題に対応しなければなりません。科学者は、自らが所属する科学者コミュニティのメンバーとして社会的責任を有するのみならず、一人一人が人間としてこれらの問題解決に向けてどのような貢献ができるかを、厳しく問われる時代となっています。このような状況の下、新しい日本学術会議が、我が国科学者コミュニティの代表機関として、その機能を遺憾なく発揮できるよういかに変身するか、これが国内外の社会から課せられた課題となっています。

会員、研連委員の皆様におかれましては、新しい日本学術会議を飛躍させるためにも、今期において成すべきことに積極的に取り組んでいただき、より良い成果を残されるよう、活動を期待します。

今後とも皆様のご理解とご協力をお願いします。

委員会報告

編集委員会より会員の皆様へ

編集委員会 島田 啓子

2005年1月の新規投稿論文の受付から、論文誓約書を提出していただくことになりました。学会ホームページおよび本学会誌最新号（第18巻2号）の投稿規程をご参照下さい。

投稿していただいた論文を迅速にかつ適正に査読を進め、会員の皆様の研究成果を掲載できるためにもご協力をお願い申し上げます。

誓約書はホームページから入手できますが、それが不都合な方は事務局に返信封筒を同数して郵送の依頼をして下さい。誓約書に必要事項（会員番号、共著者のサインなど）を記入後プリントアウトし、論文に同封して事務局へ郵送下さい。事務局から会員確認したのち編集委員会に転送されます。年々の学術集会における研究発表演題が増えつつあり喜ばしい限りです。発表された成果を原著論文や資料にして助産学の発展のためにご投稿下さいますようご案内とともにお願ひ申し上げます。

国際委員会報告

国際委員会 加納 尚美

本年7月に開催される第27回 ICM プリスベン大会に向けて、助産学会らしいツアーの企画という要望が昨年の理事会でありました。そのため活発に助産師活動を展開している近隣国であるニュージーランド助産師会に国際委員会からお願いしましたところ、快諾をいただき助産師会、病院、大学、地域活動、交流を含めた短期間ながら中身の濃いツアー企画ができました。具体的運営は業者（ケイ・コンベンション）に委託してありますので案内をご覧ください。稔りある ICM 大会およびニュージーランド助産師活動への視察および相互の交流の機会となることを願っております。

【看護・助産教育を考える緊急・フォーラム報告】

昨年秋の理事会の際に、より質の高い助産師教育を目指す取り組みについて十分に理解を得られない現状について問題提起がありました。そこで、12月初めに東京で開催される日本看護科学学会の際に近隣で緊急集会を開き、この問題について十分に議論を尽くしてみようということになり、会次第は下記の通りです。短期間の準備期間ながら、多くの方々がお集まり下さり、貴重な提言の基に活発な議論がなされました。後ほど講演録とお示しできるよう現在準備しております。運営にあたっては、助産師教育について活発な活動をされている NPO 法人お産サポート JAPAN から共催協力をいただき、広報および当日の運営、会場費一部負担等もご協力をいただきました。講師、参加者、共催団体の方々に心より感謝申し上げます。（準備担当：加納）

〈プログラム〉 緊急・フォーラム

「女性と子ども、家族の人権を守る専門職教育のあり方を考える
質の高い看護・助産教育に向けての4つの視点」

主 催：日本助産学会

共 催：お産サポート JAPAN

日 時：2004年12月4日 17時45分～20時

場 所：八重洲富士屋ホテル

参加者：84名（関係者含む）

【ICM ニュースレターから（2004年11月・12月号 p.65より）】

「安全な妊娠へ：妊娠・出産の熟練従事者の重要な役割」についての WHO、ICM、FIGO による共同事業開始

「安全な妊娠へ：妊娠・出産の熟練従事者の重要な役割」とは WHO（世界保健機関）、ICM（国際助産師連盟）、FIGO（国際産婦人科連盟）が共同で作成した声明です。この声明は出産介助の担当者の重要性に焦点をあてています。声明は公式に世界的に認められたもので、安全な妊娠・出産と2015年までに母体死亡率を75%減少させるという第5次達成目標にむけての最優先課題です。

この声明は2004年11月スイスのジュネーブで採択されました。

【助産師と妊娠・出産の熟練従事者】

出産時に妊娠・出産の熟練従事者の必要性は広く知れ渡っています。しかし、いまだにどのような人がその資質を有し、何を行うについては明確な定義ができていません。

この新しい発表は問題を明確にし、エビデンスにもとづいたガイダンスで人材のレベル基本原則をつくりあげます。

声明の序文は明確です。

“熟練ケアとは妊産褥婦と新生児に対して適切な資格と能力を有した保健医療従事者によって行われるケアである。この従事者は緊急時の産科処置を行う施設とその移送手段を保証され、適切な医療機器が利用でき保健医療システムのサポートも有している。この従事者のタイトルは国によって様々であるので、この医療従事者のことを妊娠・出産の熟練従事者と総称するとした。”

妊娠・出産の熟練従事者とは助産師、医師、看護師のように正式な資格を得た保健医療専門家のことである。これらの専門家は正常な（異常ではない）妊娠、出産、産褥を扱い、異常のあるケースを診断し、適切に管理を行い、必要時に適切な医療機関へ紹介できる者である。

この声明は WHO、ICM、FIGO によって妊娠・出産・産褥の熟練ケアとして容認する。そしてこの声明は特に出産時に妊娠・出産の熟練従事者による立合い出産が85%以下の国々を照準としている。

セクション2は妊娠・出産の熟練従事者の求められる技術と能力について明記しています。すべての妊娠・出産の熟練従事者は適切な助産技術を有し、ICMの基本的助産実践を行うための本質的能力を必要とします。妊娠・出産の熟練従事者には助産師や助産技術を有する看護師と医師、産科医を含めた医療スタッフのことを述べています。

【継続ケア】

共同声明は、妊娠・出産の熟練従事者の活動は明確に示され、助産師や他の従事者は求められる熟練度は個々の能力だけを指しているではありません。

“……妊産褥と新生児は可能な限り最良の出産となるよう継続的ケアが必要である。継続ケアは家庭から始まり、1次医療レベルから3次医療レベルまで通して安全で高品質な助産ケアが得られる。……継続ケアには医療施設の整備や高次医療機関への移送の確保などを含む保健医療システムの整備が必要となる。妊娠・出産の熟練従事者は継続ケアの担い手である。また、伝統的産婆やソーシャルワーカーなどの他のスタッフと協力し、緊急対応システムの整備された中で働くことが重要である。”

【世界レベルでの活動：WHO、ICM、FIGOの誓約】

3団体は声明だけを合意したわけではありません。妊娠・出産の熟練従事者による出産を90%という目標をかけた、精力的共同活動を用意しました。

“妊娠・出産の熟練従事者の要な役割は、妊産褥および乳児死亡率と罹患率の減少にある。WHO、ICM、FIGOは、熟練従事者ののもとで妊娠～出産、産褥まで関われる人々が増加するように共同で活動始める。また3団体だけでなく政府や政治家、保健スタッフ、ドナー、地域社会との連携活動も行っていく。……だが、発展途上国で妊娠・出産の熟練医療従事者の活動が妊産褥死亡率の低下に貢献しているというエビデンスがあるにも関わらず、発展途上国での妊娠・出産の熟練従事者の不足という問題がある。”

上記問題は、発展途上国だけではなく他の国々でもおきています。

WHOによると発展途上国での妊娠・出産の熟練従事者の最低必要数は33万3千人以上……熟練者による出産介助率は、最低で東アフリカの33.6%、次いで南アジアで37.5%、南アメリカは高レベルで84.8%です。世界平均では61%となっています。

この役目と世界的戦略において、ICMは助産学の発展と助産師同士の結びつきを強固にし、安全な妊娠・出産のために努力することを続けます。

この声明の前文は、

www.who.int/reproductive-health/publications/2004/skilled_attendant.pdf
にアクセスしてください。

注) この声明の「妊娠・出産の熟練従事者」の英語名は“skilled attendants”となっている。

日本語の適切な訳がなく、英語表記による表現でも意味がわかりにくいいため訳者の解釈にて、今回のニュースでは「妊娠・出産の熟練従事者」と表現した。

(日本語訳：永瀬つや子)

International Midwifery Volume17 Number6/2004の記事より

WHO、ICM、FIGO による共同声明

—安全な妊娠のために～ Skilled attendant の役割の重要性—

国際委員会 石川紀子

【ICM Secretary Kathy Herschderfer の報告】

妊娠をより安全にするために：WHO・ICM・FIGOの3機関は連携して、Skilled attendant (技術を持った熟練した看護人)の重要性を示した声明を2004年11月ジュネーブ(スイス)にて発表した。この中では主に、女性の陣痛・分娩における助産技術を持った人の存在の重要性を述べている。助産技術をもった人の存在は、母性の安全を達成するためにもまた2015年までに妊産婦死亡率を75%減少させる目標(the 5th Millennium development Goal)達成のためにも最も重要な課題であるということが、国際レベルで再確認された。

(1) 助産師と Skilled attendant

女性の陣痛、分娩において skilled attendant の存在は、必要不可欠であるということは広く知られている。しかし今まで、Skilled attendant は一体どのような存在なのか、何ができるのかという明確な定義はされてこなかった。今回の共同発表では、その問題点を明らかにすると共に、根拠に基づいたガイダンスも提供している。

声明の前文では以下のことを明確にしている。

1. 技術を持ったケアは全ての女性(母親)、その新生児、妊娠期、分娩期、産褥期における人々に適用され、公認された法的資格のあるヘルスケア提供者(必要な設備、サポートシステム、搬送、産科救急システムを備えている)によって提供される。
2. これまで技術を持ったケアは、有資格の保健業務従事者によって行われてきた。しかしそのケアは、それぞれの国の状況によってその名称がかわっているため、共通の名称として『skilled attendant』とか『skilled birth attendant』などとする。

3. Skilled attendant とは公認された医療の専門家である。すなわち、助産師、医師、看護師であり、正常妊娠、分娩、産褥、合併症の管理に必要な技術の修得のために教育、訓練された人である。

4. この声明は特に skilled attendant の普及率が85%以下の国に向けられている。

声明の本文では、skilled attendant に求められる技術と能力について述べられている。すべての skilled attendant は核となる助産技術をもっていなければならないと断言しており、基礎的助産実践のための ICM の必須能力にも言及している。また skilled attendant に適した職種としてまず、助産師、助産に熟練した看護師、助産技術をもつ医師、そして産科医の順にあげている。

(2) 継続的で連携したケア

出産する女性には、母親とその新生児にとって最善の結果が保証されるために継続的で連携したケアが必要である。継続的で連携したケアとは、まず始めに女性とその家族によってセルフケアや予防ケアとして家庭で行われる。続いてクリニックレベルにおいて第一段階のヘルスケアが行われ、そして質の高い助産ケアとのかかわりへとつながっていく。しかし問題が生じた場合には、第二、第三段階の医療システムが必要になっていく。

継続的で連携したケアが成果をあげるには、機能性の高いヘルスケアシステムが必要である。それは、初期のヘルスケアの段階から、クリニックや病院に搬送する手段も含んだ基盤となるシステムが整っている医療システムのことである。

skilled attendant は、その継続的で連携したケアの中心的存在である。彼らはプライマリーヘルスケアレベルにおいて、地域の他のケア提供者(伝統的な出産付き添い人やソーシャルワーカーなど)と連携して働かねばならない。また2次、3次医療レベルの医療従事者とも同様強い連携が必要である。

(3) 全世界レベルの活動：WHO、ICM、FIGO の誓約

三機関は声明の書面のみでなく、全出産の90%に skilled attendant の必要性が確立されるように力強く活動していくことを確認した。

Skilled attendant が妊産婦・新生児死亡率、罹患率の減少に中心的役割を担っていることを認識して、WHO、ICM、FIGO はすべての妊娠、分娩、産褥期に skilled attendant が携わるように強化していく活動を約束している。さらに、これらの機関は、出産する女性とその家族に継続的で連携したケアが提供されるように、政府、政策立案者、ヘルスケア提供者、ドナー、地域にこの事業を推進していく。発展途上国における Skilled attendant の存在が妊産婦死亡率の減少に貢献しているにも関わらず、多くの発展途上国では依然としてそれらの数が十分に満たされていない。この問題は、発展途上国だけではなく、skilled attendant の不足は産科領域に破壊的な影響を与えているのが現状である。

WHOによる統計では、発展途上国における Skilled Attendants の数は少なくとも333,000人必要で、中でも Skilled Attendant の普及率が低い国は、東アフリカ33.6%、南中央アジア37.5%、西アフリカ39.6%である。つまり世界的には61%の出産に Skilled Attendant が立ち会うのみである。

ICM は、助産の向上と助産師協会の強化を通して母性の安全を守る事を使命としている。我々は、今回の共同声明の普及を大いに歓迎すると共に、ICM の仕事として必須能力を編集する事などを早急に行うことを確認した。またそれ以外の進行中の業務-助産規則の普及や職能団体としての役割の拡大なども強化していく。

国際援助システム委員会報告

海外研修生招聘事業報告「ネパール現地における研修の評価」

国際援助システム委員会 毛利 多恵子

2004年12月4日から11日まで、ネパール王国プトワールにある研修生の所属する「AMDA ネパール子どもと女性の病院」において、日本助産学会が行った「自然で安全な助産」の研修評価を実施しました。

評価団は、国際援助システム委員2名と委員会外メンバー2名の4名で構成されました。研修生の所属する病院あがりの歓迎を受けました。日本で学んだ助産師と女性の関係性や助産ケアの実際が、病院を利用するネパールの女性にも効果的で役立っているとの評価を得ました。

研修終了時に作成したアクションプランも院内で実行され、課題が明確になってきており、今後は地域との連携についても考えていきたいなどの方向性もみえました。このような現地における現実的かつ効果的な変革の実現性を考えた場合、研修生が管理者と実践者の組み合わせで招聘できたことは、大変意義がありました。また、現地においても日本で受けたものと同様な研修ができればいいとの要望も受けました。研修生たちは、日本での研修は「宝物」であり、ネパールの良さにも気づくことのできた研修だったと評価してくださいました。日本での研修でネパール研修生を温かく受け入れてくださった講師の方々、大学、病院、助産所の医療スタッフの方々と女性たち、女性グループ、NGO関係者に深く感謝申し上げます。

日本助産学会には、「AMDA ネパール子どもと女性病院」から感謝状をいただきました。詳しい報告については、今後、日本助産学会誌および、助産学会学術集会で紹介させていただきます。

ネパール子どもと女性病院、評価視察の旅を終えて

嶋澤 恭子

昨年1月、ネパールからやって来た3人の研修生が「自然で安全な助産」というテーマで研修をされました。その後の評価活動の一環として昨年12月4日から11日まで（現地滞在は3日）、研修生が働くプトワールのAMDA ネパール子どもと女性病院へと赴きました。今回はその評価視察の帰国報告を簡単にさせていただきます。

視察メンバーは国際援助システム委員2名と委員会外メンバー2名の計4名です。関西空港からタイのバンコクを経由してネパールの首都カトマンズへ、そして再び空路でバイラワまで合計一日半の旅。バイラワ行きの飛行機が天候不良でカトマンズの空港に3時間足止めされた以外は順調な空の旅でした。バイラワ行きの飛行機からは世界の最高峰アンナプルナを望み、揺れの激しい飛行機も「ブッダエア」という名前に救われ、無事にバイラワに到着しました。日本に来ていた研修生のシタさん、ラクシミさんが空港まで迎えに来て下さっており、評価団メンバーに花

で作ったレイをかけて歓迎してくれました。標高が高く乾季のせい、気候は日本の12月と余り変わらず、朝晩は結構冷えました。ブッダの生誕地があるルンビニに近いバイラワから車で約1時間、プトワール市の「AMDA ネパールシッダルタこどもと女性病院」へ到着しました。

総レンガ造りの病院は、日本の建築家である安藤忠雄氏の作品だそうです。周りの自然の風景によく馴染んでおり、病院の周りには憩いの芝や林があり、そこでは、入院の方や家族が歓談したり、散策したり、診察時間を待ったりしていました。

評価活動日程はかなりのハードスケジュールで、面接調査、質問紙調査、参与観察、ワークショップ、グループディスカッションと複数の調査を行いました。病院スタッフも大変協力的で、当初予定になかった周辺地域の視察やヘルスポスト（簡易診療所）や地域のTBA（Traditional Birth Attendants）の訪問も計画に盛り込んで下さいました。病院スタッフとの懇親会では、伝統舞踊や唄などで、大変歓迎して下さいました。

病院では、日本助産学会はジャム（JAM=Japan Academy of Midwifery）として愛情と親しみを込めて語られていました。日本での研修施設や講師の皆さんの研修生に対する振る舞いが、そのまま私たち評価団へのもてなしとなって返ってきているかのようでした。この温かい人へのもてなし方も、日本の研修で受け取ったことだと研修生の一人であるラクシミさんは笑顔で語ってくれました。「日本では私たちも大切に接してもらった」と。

個人的な事情から日本で研修生たちに会うことができなかつたのですが、研修生の一人ラクシミさんから「日本での研修に行ってからイライラしなくなった。妊婦さんを待てるようになった。」という言葉を知ることができるなんて正直思いませんでした。もちろん、彼らの変革への動きは始まったばかりだと思います。しかし、日本での研修後3人は何かと話し合いの機会を持つことが増えたといいます。また、少しずつゆっくりとではあるけれど日本の研修で得た経験が、私たちにあったやり方でいいケアに繋がるように努力をしていきたいと話してくれました。

過去にJICAの母子保健研修コースに関わったことがあるのですが、それと比較しても大変質の高い研修であったと感じます。「研修内容が助産というテーマで一貫性があり、手作り感のあるケアの行き届いた研修であったこと」、そして「高いところから一方的に知識を与えるといった提示ではない研修のあり方」が特徴的であったと思います。現在、評価活動のデータ分析の途中ですが、どのようなパートナーシップのもとに他国の助産活動の専門家たちと繋がっているのか、その可能性として一つのヒントが見つかるのではないかと考えています。

また、この機会に繋がったAMDAネパールこどもと女性病院とJAMの繋がりがこれを限りにすることなく、何らかの形で「keep in touch！（連絡を取り続ける）」できる道を探っていければと思います。



国際助産師連盟 (ICM) 募金活動へのご協力依頼

日本助産学会では、機会がある毎に会員の皆さまに国際助産師連盟 (ICM) への募金活動にご賛同いただいております。今回、こうした募金活動に対する感謝のメッセージが ICM 理事長より寄せられました。また、併せて ICM 広報部から「Sponsor A Midwife 基金」と「Safe Motherhood 基金」の目的や内容についての記事も受け取りました。以下にそれらをご紹介します。会員の皆様のご協力よろしくお願いいたします。

日本の助産師の皆様へ

国際助産師連盟 (ICM) 理事会の代表として、他国の助産師が重要な国際会議に出席できるためのスポンサーとなるために、皆さま方がすすめている募金活動に対し、私どもが心から感謝していることをお伝えしたいと思います。

ICM での活動に伴う大きな喜びのひとつは、このような世界の中にあって極めて貧しい国と、豊かな国との間に橋を架け渡すために役立っていることです。私たちは、先進国で働く助産師の多くが、自分たちほどには経済的に恵まれていない仲間を援助したいとの思いが強いことを、良く知っております。

ICM が組織するスポンサー制度を通すことで、皆さまからの寄付金はすぐに対象となる助産師のために活用されることを保証できます。そして、支援を受けた助産師たちは、情報と経験を交換しグローバルなレベルでの活動について、知識を深めるための機会を熱意と共に受け入れています。

皆さまからの支援を受け、国際的な会議やワークショップに出席できる助産師は、当然のことながら非常に多くのことを得ることができます。またそれだけではなく、助産師仲間とのネットワークの利益が相互的なものだという事は、過去の経験から十分に分かっています。より経済的に豊かな国の助産師もまた、発展途上国を現場とする助産師が取り組む挑戦や課題、その解決方法などについて直接聞くことができます。それらもまた、非常に感動的で貴重な経験になり得るはずです。

そのような会議に助産師が参加できるように支援するプロジェクトは、非常に大きな価値があります。繰り返し述べますが、日本の助産師の皆さまが募金活動に注ぐ精神と活気をありがとうございます。最後に、このご努力をこれからも続けてくださることをお願いいたします。

感謝と敬意を込めて

ICM 理事長 Caroline Weaver

【スポンサー・ア・ミッドワイフ基金 Sponsor a Midwife Programme (SAM) について】

スポンサー・ア・ミッドワイフ・プログラム (SAM) は、1993年にカナダのプリティッシュ・コロンビア州助産師協会により始まり、その後、国際助産師連盟 (ICM) の事業となりました。この制度は、ICM の主な活動である国際理事・評議委員ミーティング、国際大会前ワークショップ、そして3年毎に開催される国際大会や中間会議などへ、開発途上国の助産師たちが参加できるように支援するものです。SAM の目的は、妊産婦の罹病率や死亡率が最悪の状況にある、経済的に貧しい国々の助産師に対し、教育や職能向上をはかり、セーフマザーフードの推進活動に

参加できるために、助産師個人を支援することです。

ICM 大会や会議などへ派遣するために選ばれる助産師は、以下の条件を満たしています。つまり、リーダシップを発揮できると思われる、修得した情報を実践・行動に移す能力がある、ICM の目標を達成する意欲が見られる、さらに国際大会に参加する場合は、研究論文を発表する用意があることです。適切かつ可能な場合には、ICM に加盟する各国組織・団体の会員から構成される国際理事会にも、同時に参加できます。

SAM 基金による派遣は、発展途上国の助産師を優先候補者としていますが、派遣が予定される会議が取り上げている問題を考慮し、参加がもっとも利益につながると思われる国からの候補者を優先する場合があります。派遣される助産師は、ICM に加盟している組織・団体の会員である必要はありません。原則として、連続して2回以上のICM 大会やワークショップに参加するために、同一助産師に基金より援助することはできません。

SAM 基金により、現在までにボリビア、チリ、中国、チェコ、ジブチ、ガンビア、インド、インドネシア、ケニア、マラウイ、モロッコ、ナイジェリア、パラグアイ、ポーランド、パプアニューギニア、スロベニア、スリランカ、タンザニア、ウガンダそしてジンバブエの助産師が大会や会議に派遣されています。

派遣に関わる以下の経費がSAM 基金から負担されます。

- ・住居から大会・会議開催地までの往復旅費（エコノミー・クラス）
- ・規定の滞在期間に該当する宿泊費と食費
- ・その他に大会登録費、ビザ取得費、予防接種などの費用

SAM 基金のための募金について、以下の活動が行われています。

- ・「国際助産師の日」などの機会に、ICM に加盟する組織・団体が行う募金活動
- ・他の国際機関・組織と共同でICM 理事会が行う募金活動

助産師の派遣に当たり、想定される費用の全額を賄うために、そして一人ひとりの助産師が仲間の支援に参加できるように、ICM に加盟する組織・団体やその他の助産師グループ、または助産師個人が分担して必要な資金調達を行っています。国際大会では、SAM 基金により派遣された助産師と、スポンサーとなった助産師たちが交流し、SAM 基金のあり方や評価するための懇親会も開催されています。

派遣される助産師候補者の推薦は、ICM に加盟する組織・団体、ICM 本部のネットワーク、またはICM の協力組織を通じて行われています。そしてICM 理事会が、派遣者として選ばれる助産師を最終決定します。

【セーフマザーフード (Safe Motherhood) 基金について】

セーフマザーフード計画 (Safe Motherhood Initiative) は、世界保健機構 (WHO) など複数の国際機関により1987年に開始され、ICM もただちに、「妊産婦死亡の半減を」という世界的な目標を支持し、賛同しました。当時は、世界中で最低でも年間60万人の女性が妊娠や出産が原因で命をおとしており、その死亡例の99%が開発途上国で起こっていると推定されていました。その年間60万人にもおよぶ妊産婦死亡件数を、半減することがセーフマザーフードの目標であり、ICM もこの目標達成にむけて活動を行ってきました。

しかし、悲しいことに、現在の統計でもこの数値にあまり変化や減少はありません。そして、国際連合 (UN) などによる「ミレニアム開発目標」の5番目にも「妊産婦の健康を増進する」ことが取り上げられ、1990年から2015年の期間において、妊産婦死亡率を4分の3まで減少することが目標となっています。

ICM は、全世界の妊産婦死亡のほとんどが起きている開発途上国の助産師の教育や実践活動

を支援し続けています。その最も重要な活動が、妊産婦の死亡にかかわる問題をテーマにした、ICM 大会前ワークショップの定期的な開催です。またこうしたセーフマザーフードのためのワークショップは、開発途上国が多く加盟する地域でも開催され、ICM アフリカ地区評議会などが主催することもあります。そして、こうした重要な機会に当該国の助産師が参加できるためのスポンサー制度を設けています。さらに ICM では、開発途上国の僻地で働く助産師の移動手手段として、自転車などの購入資金も送っています。

こうした ICM による「セーフマザーフード基金」は、開発途上国で妊産婦の安全のために尽力する助産師たちをサポートしています。そして、ICM による基金をサポートしているのが、世界中の助産師の仲間たちです。

【募金のお願い】

本学会では下記の募金を受け付けています。
会員の皆様のご協力をお待ちしています。

ICM スポンサー・ア・ミッドワイフの募金

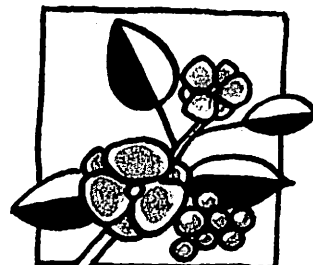
発展途上国の助産師が会議に参加できるための募金です。一口2,000円です。

振替口座番号 00190-8-710931 日本助産学会国際基金

セーフマザーフード基金の募金

妊産婦死亡の高い地域において、妊産婦の安全のために尽力する助産師たちをサポートするための募金です。一口1,000円です。

振替口座番号 00240-8-6818 日本助産学会ICMセーフマザーフード基金



平成17年度 日本助産学会 研究助成公募

応募締切日：平成17年3月25日（金）

平成17年度の研究助成応募は、以下の要領にしたがって手続き下さいますようお願い致します。

【応募手続】

1. 申請書の請求

日本助産学会ホームページ (<http://square.umin.ac.jp/jam/>) の、研究助成からダウンロードできます。

または、氏名・所属機関（大学・学部等）の名称・送付先（大学名等の宛名も記入）を記入のうえ、郵送料として90円切手を同封して下記宛にご請求下さい。（急ぎの場合は速達料270円切手も同封）

2. 応募方法

日本助産学会の申請書（コピーして使用可）に必要な事項を記入し、作成した申請書の原本と返信用ハガキ（受領連絡用）を同封し、下記にお送り下さい。

- ・申請書は、返信用ハガキに研究代表者名、郵便番号、住所を記載し、申請書の左上部ホッチキス止めとしてください。
- ・申請書は受け取りを明確にするため、簡易書留でお送り下さい。また、3月15日以降に応募する場合は簡易書留速達にて送付願います。
- ・申請書は日本助産学会にて受付後、受領ハガキを送付いたしますので、未着の場合はご確認願います。

3. 研究課題

1) 委託研究課題

本学会は「健やか親子21」の推進協力団体として登録しています。推進協議会における担当は、課題2「妊娠・出産に関する安全性と快適さの確保と不妊への支援」です。

そこで平成17年度の委託研究課題の公募は、本事業に関連した研究課題とします。

詳しくは「健やか親子21」のホームページ

<http://rhino.yamanashi-med.ac.jp/sukoyaka/>をご覧ください。

2) 学術奨励課題

助産学の発展、助産実践の改善と開発、その他母子保健領域の学際的調査、研究など

4. 応募締切日：平成17年3月25日（金）必着

5. 助成規模：学術奨励研究助成2件以内、委託研究助成2件以内とする

学術奨励研究助成（30万円／1件当たり）委託研究助成（50万円／1件当たり）

6. 応募に関しての留意点（下記の諸点に反する場合は書類不備で失格となります）

- ・申請書は、直接書込みまたはワープロ直接印字（ワープロの文字の切貼りも可）、手書き（但し黒インク・黒ボールペンを使用）にて作成願います。提出された申請書は返却しません。

7. 応募・お問い合わせ先（申請書の請求先）

日本助産学会事務局

〒102-0071 東京都千代田区富士見1丁目8番21号（財）東京都助産婦会館3階

電話・Fax：03-3221-0417 E-mail：jam1987@ninus.ocn.ne.jp

URL：http://square.umin.ac.jp/jam/

子どもを亡くした母親たちと共に (3)

セルフヘルプ・グループと助産師

聖路加看護大学大学院博士後期課程 太田尚子

二回に渡って、流産・死産・新生児死亡で子どもを亡くした母親たちのセルフヘルプ活動について書いてきました。最終回は、セルフヘルプ活動に、助産師がどのように協働するか、また助産師にできることは何かということについてお伝えいたします。

哀しみの中にいる母親や家族の力になりたい。そう思って、助産師は入院中のケアに力を注いでいることでしょう。入院中のケアは勿論大切ですが、それは母親たちのグリーフ・ワークの最初の短い期間に関わるのに過ぎません。体験者同士の交流は、その後の長い哀しみや苦悩の時期を、大きく支えます。助産師にできることは、体験者同士の語り合いが、グリーフ・ワークの促進やエンパワーにとって重要であることを知ること、そしてセルフヘルプ・グループを母親や家族に紹介することです。

それでは紹介の方法について、具体的に説明しましょう。まず時期は、退院時などの比較的早い時期がよいでしょう。退院後しばらく、母親たちは、痛みの助長を避けて家にこもっていることが多く、外出できるまでに1ヶ月以上の時間が掛かります。しかしこの間、孤独感を募らせています。体験者との交流は、自分だけではないと思うことができ、孤独感の解消を促します。また母親たちは、自責感、嫉妬、怒りなどを感じています。同じ体験者との交流によって、このような感情がグリーフ・ワークの通過点であって、体験者の多くが抱く感情であることを知ることができます。語らいの後、「心が軽くなった」と感想を述べることに、象徴されていると言えるでしょう。さらに、お話会だからといって、語れなければいけないということはありません。最初は参加するだけで精一杯の方、語れない方もいます。しかし、他の参加者や体験者スタッフの話の聞くなかで、語れるようになっていきます。実際の参加者は1ヶ月後から、1～2年経った方と幅がありますが、参加したい気持ちが出てきたならば、なるべく早い方が助けになるようです。紹介の方法は、参加したい気持ちが現れたとき、いつでも見ることができるパンフレット、あるいは紙に記載したものを手渡すことが望ましいでしょう。ショックのなかにいる入院中は、口頭の説明が記憶として留まらないこともあります。最初は気持ちが揺れて、参加を躊躇するかもしれません。そんなときは、「同じ体験者同士の語り合いが、きっと助けになる」と言って、少し背中を押してさしあげると、一歩を踏み出させることもあります。会に参加することを、退院後の目標にしている方、セルフヘルプ活動への参加を続けることで、エンパワーされ、豊かに成長されていく方もいます。

次に、セルフヘルプ活動における助産師の協働の一例として、聖路加看護大学で開催している「天使の保護者ルカの会」(以下「ルカの会」という)をご紹介します。ルカの会では、毎月のスタッフミーティングにおいて、会の事後評価や今後の企画・運営について意見を出し合いながら、WAIS(お空の天使パパ&ママの会)スタッフと助産師とが、共に会の運営に携わっています。助産師がセルフヘルプ活動に参加する意義は、体験者の退院後の様子や率直な気持ちを理解できること、ケア再考への示唆が得られるなどがあります。一方、セルフヘルプ・グループにとっては、他の医療者への啓蒙が促される、また活動がしやすくなるなどがあります。体験者と医療者が協働することによって、ニーズに即した効果的なケアやサポートシステムの構築が可能になります。

最後に、参加者のアンケートのなかから、死産後2ヶ月の母親の感想をご紹介します。

「お話しを伺い皆様からエネルギーを頂きました。……初対面の方々なのにありのままの状態を話せて、曇っていた心に日が差し込んだみたいで元気をいただきました。最初は躊躇していましたが、思い切って参加して良かったです。」

体験者が最も有効な支援者となるような活動の可能性を見つけてみませんか。助産師が力をつけた体験者とともに、医療機関から少し距離を置いた組織として、地域でセルフヘルプ活動を展開してみませんか。多くの輪が広がっていくことを願っています。

天使の保護者ルカの会 <http://www.kango-net.jp/event/angel/index.html>
E-mail:osoranotensi@slcn.ac.jp



Japan Academy of Midwifery
第19回 日本助産学会学術集会

第19回日本助産学会学術集会会長 宮 中 文 子

出産・子育てを支える助産ケア：人と環境の視点から
Midwifery Care for Childbirth and Child Rearing: Human and Environmental Perspectives

■ 1. 期 日 2005年3月19日(土)～20日(日)

■ 2. 会 場 国立京都国際会館

■ 3. プログラム

● 第1日 3月19日(土)

会長講演 13:10～13:50
出産・子育てを支える助産ケア
・演者 宮中 文子(京都府立医科大学)
・座長 福井トシ子(杏林大学医学部付属病院)

特別講演 13:50～14:50
京都の伝統文化：冷泉家の年中行事
・演者 冷泉貴実子(冷泉家当代表人)
・座長 堀内 成子(聖路加看護大学、日本助産学会理事長)

総 会 14:50～15:50

教育講演1 15:50～16:50
高度専門職としての助産教育
・演者 近藤 潤子(天使大学)
・座長 平澤美恵子(日本赤十字看護大学)

教育講演2 16:50～17:40
近代における産婆の活動－「ある近代産婆の物語」をとおして
・演者 西川 麦子(甲南大学)
・座長 坂井 明美(金沢大学)

懇 親 会 18:00～20:00 国立京都国際会館 宴会場スワン

展 示 「産婆の黎明期における産婆教育と出産」(京都府立医科大学助産史研究会)

● 第2日 3月20日(日)

一般演題発表及びシンポジウム、5つのワークショップ

● シンポジウム

健やか親子21における助産師活動 9:30～11:00

● ワークショップ

専門職としての助産実践のエビデンスの模索 11:00～12:30

国際的協働による助産師活動を探る 13:30～15:00

ハイリスク新生児と親への発達のケア 15:00~16:30
 助産院と病院の助産師達による新たな取り組み 9:30~11:00
 子ども虐待とDVの予防における助産師の役割 11:00~12:30

■ 4. 日程概要

	9:00	9:30	10:30	12:00	12:30	13:00	13:10	13:50	14:50	15:50	16:50	17:40	18:00	20:00
第1日 3/19 (土)	新理事 会	理事会	評議員会	新評議員 会	会場オリ エン	会長 講演	特別 講演	総会	教育 講演	教育 講演			懇親会	
第2日 3/20 (日)		シンポジ ウム	ワークシ ョップ					ワークシ ョップ	ワークシ ョップ	閉会式				
		ワークシ ョップ	ワークシ ョップ					一般演題(口演)						
		一般演題(口演・ポスター)						一般演題(口演・ポスター)						
	9:30			12:30			13:30			16:30				

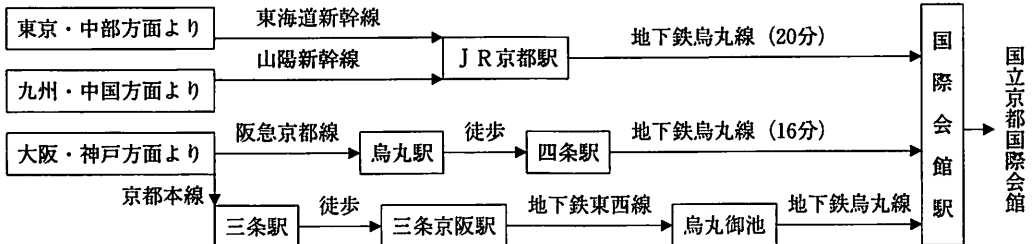
■ 5. 参加費について

1) 学術集会:

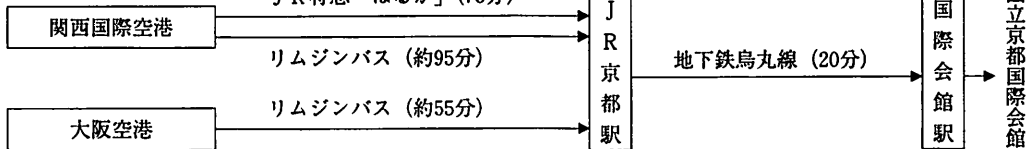
- ①会員: 9,000円 ②非会員: 10,000円 ③学生(大学院生を除く)及び一般4,000円
- ④医療関係者以外一日券: 2,000円
- 懇親会費: 5,000円

■ 6. 会場へのご案内

鉄道をご利用の場合



飛行機をご利用の場合



お車をご利用の場合 名神高速道路京都南I.C.または京都東I.C.より市内道路標示の「国立京都国際会館」を目印にお越しください。

■ 7. 連絡先

〒602-0857 京都市上京区清和院口寺町東入中御霊町410
 京都府立医科大学医学部看護学科 母子看護学・助産学部門
 第19回日本助産学会学術集会事務局
 TEL・FAX: 075-212-5440 (宮中) 075-212-5445 (松岡)
 URL <http://jam19.umin.jp>

第27回 ICM (国際助産師連盟) 日本助産学会ツアー

【ご出席案内】

- 第27回 ICM 会期 (ブリスベン) : 2005年7月24日~28日
- ニュージーランド視察 (クライストチャーチ・クイーンズタウン)
: 2005年7月29日~8月1日

冠省 皆様方に於かれましては益々御清祥の段お慶び申し上げます。

この度、日本助産学会におかれまして「第27回 ICM (国際助産師連盟) 日本助産学会ツアー」として、第27回 ICM 会議とニュージーランドのクライストチャーチ・クイーンズタウンの訪問研修ツアーが企画されましたのでご案内を申し上げます。

この企画は「New Zealand College of Midwives (NZCOM)」の元会長 Karen 先生からのご紹介で、Hendry 先生により現地での視察先等プログラムを組んで頂きました。全行程、Hendry 先生に同行して頂き、訓練室等の視察や、食事会・現地スタッフとの意見交換会など用意しております。

Hendry 先生は NZCOM 中の The Midwifery Maternity Provirger Organization のエグゼクティブディレクターでニュージーランド内の Midwives の全般に精通された方です。大変有意義で充実した内容である事は申すまでも有りません。是非この機会をご利用頂き多数のご参加をお願い申し上げます。尚、募集人員は現地受け入れの制限も有り30名様までとさせていただきますのでご了承の程お願い申し上げます。

*Hendry 先生については、ホームページ <http://www.nzcom.org.nz> 内の MMPO の頁にて写真と共に詳しく紹介されています。

多数のご利用を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

草々

お問い合わせ、お申し込み：

お取り扱い旅行代理店、(株)ケイ・コンベンション

〒160-0022 東京都新宿区新宿 1-31-3-409

電話：(03)5367-2382

ファックス：(03)5367-2187

E-mail：araki-ken@k-con.co.jp

担当：荒木憲治、坂倉里奈

第27回 ICM (国際助産師連盟) 日本助産学会ツアー

〔日 程 表〕

日次	月日(曜日)	都市・地名	時 間	交 通	摘 要	食 事
1	7月23日(土)	東京(成田)第2 T 大阪・名古屋各地	発着 21:35	QF360	カンタス航空にてプリズベンへ	機
2	7月24日(日)	プリズベン	着 7:15		着後、専用バスにてホテルへ	機
3 4 5 6	7月25日(月) ～ 7月28日(木)	プリズベン滞在			第27回国際助産学会 ご出席	朝
7	7月29日(金)	プリズベン クライストチャーチ	発着 9:00 14:25	QF55	カンタス航空にてクライストチャーチへ 着後、クライストチャーチ市内小観光 17:00～ NZCOM の概要説明と夕食会	朝 機
8	7月30日(土)	クライストチャーチ滞在			8:30～ New Zealand Colledge of Midwives 11:00～ Lincoln Hospital 14:00～ Christchurch Womens Hospital 14:30～ Midwifery School at Christchurch Polytechnic 18:00～夕食	朝 昼 夕
9	7月31日(日)	クライストチャーチ クイーンズタウン	発着 8:50 9:40	QF55	着後 クイーンズタウン市内観光	朝 昼
10	8月1日(月)	クイーンズタウン滞在			9:00～ Lake Hospital 10:30～ Midwifery Maternity Hospital 12:30～ Lunch (Cromwell) 15:00～ Meet Local Midwives 18:00～ Dinner with Local Midwives	朝 昼 夕
11	8月2日(火)	クイーンズタウン オークランド オークランド シドニー シドニー	発着 13:50 15:40 18:05 19:30 22:15	QF4190 QF44 QF21	クイーンズタウンよりオークランド乗り継ぎシドニーへ シドニーより帰国の途へ	朝 機
12	8月3日(水)	東京(成田)第2 T 大阪・名古屋各地着	着 6:35		着後、通関、解散	機

利用航空会社：カンタス航空 (QF) お食事：日程表記載とおり

〔旅行参加費用〕(会議とニュージーランド研修/9泊12日)

東京発着：¥475,000 大阪発着：¥473,000 名古屋発着：¥476,000

※一人部屋差額：¥97,000-

※ビジネスクラスご利用差額：¥385,000-

最少催行人員：20名

所定の最少催行人員に達しない場合には旅行形態の変更もしくは旅行を中止させて頂く場合があります。

詳しくは、問合わせ先 (TEL: 03-5367-2382) へご連絡を下さい。資料等をお送り申し上げます。

*上記料金は2005年1月の料金を基に算出しております。スケジュール、料金は変更になる場合がございます。

日本母子ケア研究会

「第6回 実践報告会」のご案内

〈テーマ〉 赤ちゃんに学ぶ母乳育児
— 赤ちゃんのしぐさが意味するもの —

日 時 平成17年6月12日(日) 10:00~16:00 (開場9:20~)

場 所 銀座ヤマハホール
東京都中央区銀座7丁目9-14
代表 03 (3572) 3139

*** 募 金 の お 願 い ***

本学会では、下記の募金を受付けています。
会員の皆様のご協力をお待ちしています。

- * ICM スポンサー・ア・ミッドワイフ (国際基金) の募金について
発展途上国の助産師の参加用援助としての募金です。一口2,000円です。

振替口座番号：00190-8-710931
加入者名：日本助産学会国際基金

- * セーフマザーフード基金の募金について
世界で妊婦死亡率および罹病率が最も高い地域における助産の知識の発展を支援するための募金です。一口1,000円です。

振替口座番号：00240-8-6818
加入者名：日本助産学会 ICM セーフマザーフード基金

(会計：岸田)

平成17年度会費 (10,000円) 受け付け中です！

- ・ 郵便振込をご利用の方で平成17年度会費納入がまだの方は円滑な事業推進のためできるだけお早め (5月末) にお振込をお願いいたします。
振込先は下記 (振込用紙は郵便局備え付けの用紙をご利用ください)
振替口座番号：00100-5-83244
加入者名：日本助産学会
- ・ 平成17年度から退会を希望される方は必ず平成16年度分までの年会費をお納めの上事務局までご連絡下さい。
- ・ 退会のお申し出がない場合は会員継続として会費をお納めいただきますのでよろしくお願い致します。

会員皆様のご理解とご協力を、どうぞよろしくお願い致します。